

令和4年度 公立八鹿病院看護専門学校 学校評価結果の報告(公表)

本校は、「保健師助産師看護師法第11条」の看護師養成所の指定を受け、指定規則に則り、運営しています。「看護教育自己評価指針」に基づき、学校評価を平成26年から実施し、教育の質の向上をめざし、学校運営の改善に努めています。

令和5年3月に学校関係者評価委員会を開催いたしました。令和4年度の学校自己評価結果、重点目標の取り組み状況と結果を報告し、改善への示唆をいただきました。

令和4年度の重点目標は以下の通りです。

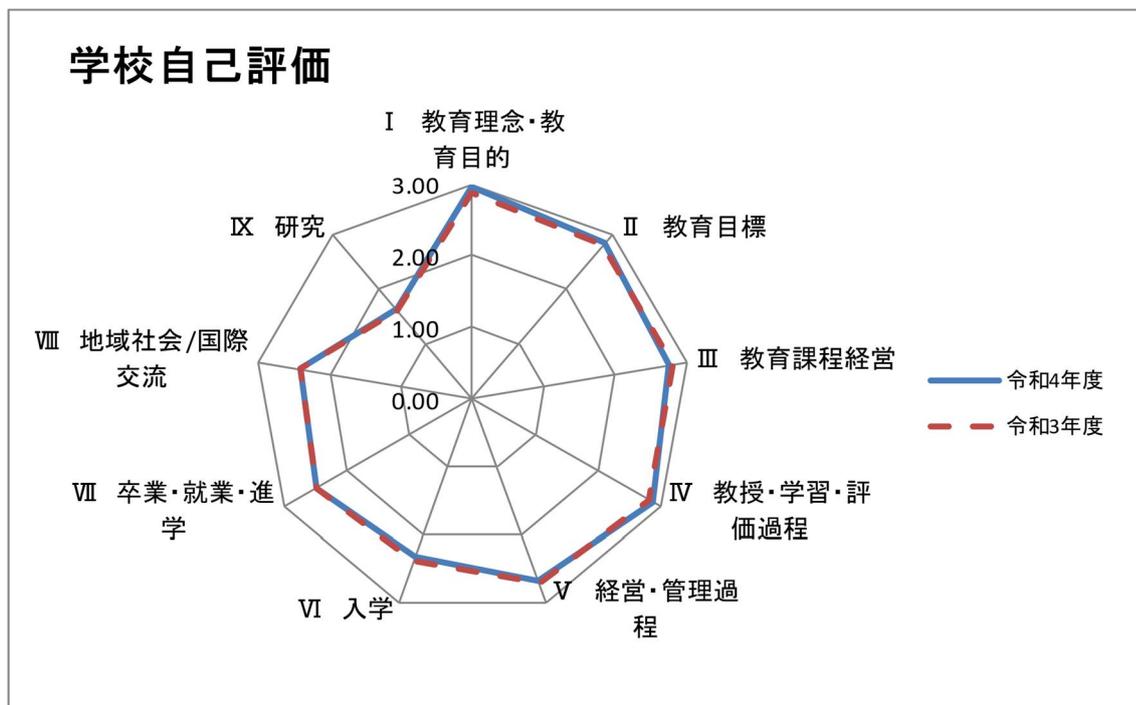
重点目標1. 教育内容の充実をはかる

- 1) 評価計画を検討する
- 2) 教員の教育・研究活動の充実

重点目標2. 学校について地域社会に説明する

- 1) 学校の活動報告を適時行う
- 2) 定員を満たすよう入学生の確保を行う

以下は、令和4年度の学校自己評価の結果です。令和4年度はカリキュラムの改正後の初年次の運営である為、全ての項目について評価を行いました。



評価項目	評価概要	令和2年	令和3年	令和4年
I 教育理念・教育目的 (11項目)	社会の変化に対応し人々のニーズを満たし、質の高い看護師の養成に努め、看護師養成所の責任を果たしているかを評価しました。	2.9	2.9	3.0

II 教育目標 (7項目)	教育理念・教育目的と一貫性があり、卒業時の到達目標を明確にして教育内容を精選しているのかを評価しました。	2.8	2.8	2.8
III 教育課程経営 (31項目)	学生に効果的かつ質の高い教育を実践するために、教育課程が適切に運営されているのかを評価しました。	2.7	2.8	2.8
IV 教授・学習・評価過程 (17項目)	授業内容が教育目標と一貫性があるか、また教育内容が妥当なものか学生による授業評価や教員の自己評価が授業の改善につながっているかを評価しました。	2.8	2.8	2.9
V 経営・管理過程 (36項目)	予算計画、事業計画が適切に執行され管理されているか。また、学生への支援が適切に行われているのかを評価しました。		2.7	2.7
VI 入学 (2項目)	教育理念・教育目的に基づいた学生の確保のため、入学選抜等が適切に運用されているのかを評価しました。		2.4	2.3
VII 卒業・就業・進学 (8項目)	卒業時の到達状況を把握と卒業後の活動状況の評価を教育に反映させることができているかを評価しました。		2.5	2.5
VIII 地域社会、国際交流 (10項目)	地域社会への貢献度及び国際交流について評価しました。	2.9	2.4	2.4
IX 研究 (3項目)	教員の研究的姿勢、活動の状況について評価しました。		1.6	1.6

注：令和2年度は重点目標に関連する項目のみ評価致しました

学校関係者評価委員会

【開催日】 令和5年3月24日(金)13:00～

【出席者】

評価委員

公益社団法人兵庫県看護協会 但馬支部理事 福井あけみ氏

立命館大学 教授 長澤麻子氏

公立八鹿病院 看護部長 高階優子氏

卒業生代表 看護師 細見詩保代氏

学校側出席者

学校長：濟 昭道 事務長：鯉淵朝生 教育課長：坂本真由美

主任：杉垣ひとみ 谷口留充 田中佳代子 和田美穂 大海貴子

専任教員：小椋貴文 小谷和大 櫻井幸子

【評価委員からの意見】

1. 入学・卒業・就業・進学について

- 入学生の推移、卒業率の推移は、その年度のみではなく、広く捉えられた方が良いのではないかと。何が要因となっているか、世の中の傾向(看護教育界全体なのかなど)と比べてどうなのかなど検討すると良い。
- この3年間はコロナ禍であり、その影響の検討も必要である。大学においても対面授業が再開されるにつれ、コロナ後の学生支援とそれを支える教員負担が課題となっている。3年間の修業年限内で卒業でき

ない学生も増加している現状では教員負担が憂慮される。

- 但馬地区看護協会でも看護師不足は痛感している。若い世代の定着、地域貢献を実施していることへの意識の向上の必要性を感じている。
- 広報活動は若者のニーズに応じたSNSの活用が必要である。地域の大学の学生と協働した開拓もできるのではないかな。
- SNSの活用や動画作成などのICT能力のある人材確保も今後は必要になる。
- 卒業生には様々な活躍をしている人もいる。そのような先輩の姿を紹介することをすすめる。
- 病院では令和5年度からトライやるウィークや看護体験を行っていく方針であり、看護学校紹介など協力できる。

2. 学生支援と教授活動準備のバランスについて

- 教員確保に取り組み中であるとのこと。教員確保だけでなく教員の継続した就労、一部の教員への業務偏重の課題も挙がっていた。教員自身の時間管理も必要である。
- 複数のカリキュラムが動き、苦勞されたことが伺える。大学では各学部で複数のカリキュラムが動き、その都度事務方との連携が重要になる。小規模校では一人の教員が全てを把握・運営するなど負担が大きく、学生支援に多大な影響を及ぼすため、学校組織からの配慮が必要である。

3. カリキュラム評価について

- 新カリキュラムの運用状況や、授業展開に関する評価はあるが、その後の解決策が更に明らかであれば良い。

【学校関係者評価委員会を終えての取り組み】

- 活動の中で得られたデータは点で見るのではなく、科学的根拠・研究的視点を持ち、広い視点で分析します。その上で影響因子の検討や、取り組み過程の評価を行い、報告します。
- 地域特性を活かした、魅力ある学校紹介、学生が自分自身の将来の姿を考えられるよう、目標となるような先輩のリアルな活動を紹介し、学生確保に取り組みます。
- 学校の活動の報告は、受け手のニーズに応じたSNSの活用を目指します。
- 新カリキュラムと旧カリキュラムを安全に運用することに努めます。1年目の新カリキュラムの評価を活かし、課題を解決できるよう、組織全体で具体的な目標を定め運用します。そのためにも昨年からのカリキュラムルーブリックの活用を目指します。
- 授業評価、授業過程の評価は結果の報告に終わらず、次につながる具体策を組織内で共通理解し、実践します。
- 学生支援の充実のために、教員間の協力・支援体制を整えます。また、それぞれの教員が自己の考えを表現し、強みを発揮できることを目指します。